

# 『サバール』を取り巻く人々 ——日本人愛好者とセネガル人ミュージシャンの事例から——

菅野 淑

## はじめに

「サバール *Sabar*」とは、西アフリカに位置するセネガル共和国<sup>1</sup>の沿岸部を中心に演奏される独自の太鼓である<sup>2</sup>。何種類かある太鼓の総称であり、それに付随して踊られるダンスやステップのことも指し、さらにはそれらが演奏される場のことも「サバール」と呼ばれている。ここでは、その「サバール」を取り巻く人々に注目する。日本から地理的にも心理的にも「遠い」セネガルの太鼓／ダンスではあるが、日本にもその愛好者は存在し、サバールの演奏活動やクラス（ワークショップ）に従事する在日セネガル人もいる。

筆者は2005年より継続的に、セネガルおよび愛知県名古屋市を中心に日本国内において、セネガルや近隣諸国のダンスや太鼓を演奏／愛好する人々の調査研究をおこなってきた。調査を開始してから現在までの約15年の間にも、「サバール」を巡って様々な変化が生じている。本稿では、日本人の「サバール」愛好者を中心に、日本およびセネガル現地でのセネガル人との関係性や取り巻く環境の変化等を明らかにする。さらに、欧米を中心とした他諸国の愛好者との関係性についても言及する。

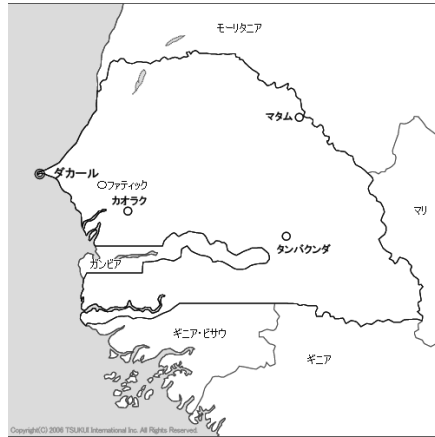
現在、日本とアフリカ、双方の人々の移動とその目的に焦点を当てたものとしては、例えば、アフリカ人の日本における経済活動やコミュニティ活動に関する研究がある。また日本からアフリカへ向かう人々に関しては、JOCV（青年海外協力隊）などのボランティア活動や、日本企業のアフリカ進出の報告などがある。本稿では「サバール」という文化的なものを基軸にしつつも、国家レベルの文化事業や企業レベルでの国外進出に伴う「移動」ではなく、ごく「普通の人々」が、双方向に、または多方向にトランスナショナルな移動を繰り返す現象に注視する。それは決して「強制」ではなく、個人の意思が少なからず反映された移動である。こうした「ある程度」の自由意思による草の根的な移動が、本来は意図していなかった部分での文化の伝播や受容に影響を与え得る可能性について考察したい。

## 1. 問題の所在と本研究の位置づけ

セネガルでは、フランス植民地政府からの独立翌年1961年に、文化政策の一環として国立舞踊団 (*National Ballet troupe*) が創立された。初代大統領レオポルド・サンゴール *Léopold*



地図1 アフリカ大陸



地図2 セネガル地図

*Sédar Senghor* は、舞踊を、自国の文化の「大使的役割」を担うものと位置づけ、国内および世界の主要な劇場でパフォーマンスするよう命じた。セネガルの文化政策により創出された舞踊に関しては、Castaldi【Castaldi 2006】などが詳細に記述している。

「サバール」はこういった舞踊団で演奏されるのみならず、セネガルの人々—特に沿岸部に住む民族—にとっては、命名式や結婚式などの人生儀礼から学校行事、憂さ晴らしの場、娯楽などの機会に日常的に演奏されており、欠かすことのできないものである。また、この「サバール」を演奏することに特化した職能集団（以下、ゲウエル *géwël*）<sup>3</sup>が存在しており、週末ともなれば街のあちこちで演奏される様子が見られる<sup>4</sup>。

「文化的大使」として、舞踊団は世界各地で演奏活動をおこなってきた。1980年代以降には、ワールドミュージック・ブームの影響もあり、世界中に広がりを見せていたが、日本には当時、欧米を通じて紹介されるにすぎなかった。しかし、1990年代半ばより、太鼓やダンスを習得するために直接アフリカ現地へ渡航する日本人が増え始めるとともに、2000年以降は来



写真1 セネガル首都ダカールの路上で開催されるダンスパーティ。夜中におこなわれることも多い。(2019年8月筆者撮影)

住するアフリカ人も増加傾向にあり、次第に直接的に日本へ紹介されるようになった【菅野 2010, 2011】<sup>5</sup>。

先述した通り、筆者は 2005 年以降継続的に、日本で活動するセネガル人や日本人の愛好者を追っている。彼らは互いに影響しあってきたが、その過程において、活動状況や彼らを取り巻く環境、その関係性にも少しずつ変化が生じていることが明らかになってきた。また、それは日本国内に限らずセネガル現地においても同様の変化が見受けられた。これは筆者が関わりだしてからの約 15 年間に於いて、より多くの人々—日本人ないしセネガル人—が現地と行き来し、その関係性が深まったのみならず、SNS 等のソーシャル・メディアの発達により、ヒトとヒト、場所と場所の「心理的な距離の近さ」が進んだからこそその現象ではないかと考える。

現代はグローバル化が進み、より多くのヒト、モノ、カネ、情報、文化、感染症などが国をまたいで頻繁に届けられる時代である。国境を越えた／超えた人々の活動を通して、双方または他方に何らかの影響を与える／受けることは避けがたくなっている。セネガルという国、そして「サバール」という太鼓は、地理的・心理的・文化的に遠い日本において、知名度は低く、一見するとこれを介した人々の移動によって与える／受ける影響は皆無にも見える。しかし、こういった草の根レベルの事象を詳らかに見ていくことは、俯瞰的な国家間レベルでは掴み取ることのできない影響や変化等を促えることが可能となり、より加速するグローバル化社会の一端を明らかにできるだろう。さらには、「文化的大使」として国の威信をかけ発信されてきたセネガルの舞踊／音楽が、国が想定していなかった部分で、つまり国家レベルではなく草の根レベルで、実はその役割を果たしてきている可能性について言及したい。

## 2. 日本人愛好者とセネガル人ミュージシャンの関係の変化

### 2-1. 日本における関係性

本稿においては、セネガル人で太鼓やダンスを日本人に教えたり、ステージ等で演奏したりしている人々のことを便宜的に、セネガル人ミュージシャンと称する。彼らは、セネガル在住当時は舞踊団に所属していたり、地元の太鼓隊のメンバーだったり、ゲウエルの家系だったり、「サバール」に関わる活動をしていた。中には、愛・地球博のような国レベルでの文化事業をきっかけに来日したパターンもあるが、彼らの多くは日本人配偶者を得たことによるものか、先に来日していた親族の呼び寄せによって訪日したパターンが多い。彼らは、日本では、教えたり演奏したりすることを生業にしているのではなく、他に何かしらの仕事—言語習得レベルによって業種は異なる—に就いている場合がほとんどである。それは、「サバール」に関わる仕事が日常的に日本にないことが理由のひとつにあるが、彼らは日本で、業種は何であれ働くことが主たる滞在目的となっていることが多い。つまり、彼らは「サバールをする」ために来日<sup>6</sup>したのではなく、あくまでも「サバール」は付随的なものに過ぎないのである。とはいえ、程度の差はあれ日本国内においても何かしら「サバール」に関わる活動をし、それで少

なからず金銭を稼いでいることに違いはない。

筆者が調査を始めた2005年当時から2010年頃にかけては、在日セネガル人ミュージシャンはおろか、在日アフリカ人そのものの数は決して多くなかった。もちろん、1990年代には既に東京を中心に数名のセネガル人が演奏活動をしていたが、全国的に見てみるとその数は他の在日外国人に比べれば圧倒的に少数だった。日本人の愛好者数も多くはなく、東京を中心にごく一部が愛好しているに過ぎなかった。2000年代に入ると、全国的に、西アフリカの太鼓ジェンベ *Djembe*<sup>7</sup> を中心とした、いわゆる「アフリカン」に興味を持つ日本人の愛好者が増え始め、関東や関西各地で大規模なイベントが定期的開催されるようになっていった。そうではあっても、ジェンベを演奏する在日アフリカ人ミュージシャン数も多くはなく、居住地は都市部に限られていた。そのこともあり、彼らや短期来日のミュージシャンによる日本各地でのイベントやワークショップは常に盛況だった。また、日本人で既にある程度の演奏技術を習得した愛好者によるワークショップも盛況だった。

2005年当時、東海地方に住むセネガル人ミュージシャンはダンサーのAM氏1名（現在も）だった。氏は当時、ジェンベのダンスクラスを平日の夜に定期的開催しており、毎回10名弱の生徒が集まっていた。また、時にはジェンベのドラムのクラスも開催していた。氏はセネガル人ではあるが、セネガル在住時は地元の舞踊団に属しており、ジェンベダンスも習得していた<sup>8</sup>。そして、たいていの舞踊団所属ダンサーは少なからず太鼓の演奏もできる<sup>9</sup>ため、ドラマーがいない場合は太鼓も教えていた。当時の日本で「サバール」はほとんど知られておらず、氏は日本人に人気があり、「サバール」より比較的取り組みやすい<sup>10</sup> ジェンベをクラスで選択していたようだ。

AM氏は毎年生徒の発表会を兼ね、関東在住のセネガル人ミュージシャンを招聘し、東海地区でコンサートを開催していた。筆者も数回、生徒として出演した。しかし年々客足が減少、2009年以降コンサートは開催しなくなり、さらに、定期開催のダンスクラスも不定期で開催するようになっていった。

こうなった経緯のひとつとしては、日本の「アフリカン界」に生じた、ある種の「マンネリ化」が挙げられるだろう。当時、ジェンベに関してもギニア共和国で演奏されているジェンベのスタイル一辺倒だった。イベントなどで演奏されるリズムもどのグループもほぼ同じで、まさに飽和状態になっていた。演奏の流れやショーとしての見せ方もどこも似通ってきてしまい、「新鮮味」がなくなってきたとも感じられた。当時聞き取り調査をした、ある愛好者の語りがある。それは、「あの人のライブ（コンサート）は何度も見たので、もう（行かなくて）いいや。」というものだ。当初はすべてが新しく知らない世界だったものも、自身もある程度技術を身につけ演奏ができるようになってくると、より新しいもの違うものを見たいと思い、現状に飽きてくるものだ。そういった客層に対し、在日セネガル人ミュージシャン側も、「新しいものを見せたい」と当時語ってはいたが、なかなかその後の集客には繋がらなかった。

二つ目の理由としては、2000年代より活動してきた愛好者たちの、ライフスタイルの変化による関わり方の密度の変化が挙げられる。2000年代当時20代前半～30代前半だった愛好

者たちは、年齢が上がるにつれ、それぞれ結婚したり出産したり、仕事上で重要な役職に就くようになったり、または新しい習い事や趣味に傾倒するようになったりと、ライフスタイルに大きな変化が生じるようになった。もちろん中には結婚・出産後も続けている愛好者もいるが、やはり多くはかつてのように時間を割くことが難しくなったようである。

また、これは東海地区に限ってのことかもしれないが、2005年に愛知県で開催された愛・地球博から10年以上経ち、この地方の国際交流熱が薄れてきたことも集客減少のひとつの要因とも考えられる。これはある国際交流フェスタ主催者から聞かれたことだ（2019年4月聞き取り）。東海地区は愛・地球博以降、多くの国際イベントが開催されてきた。しかし、氏によれば主催する国際交流フェスタも、名古屋市中区栄という中心地での開催にも関わらず、近年は集客が減ってきているのが分かると言う。確かに筆者もそのイベントに関わったことがあるのだが、近年のパンフレットを見ても出展数は減り、またイベント当日の活気もかつてほどではないことを目にしている。

こういった状況にも関わらず、2010年以降、年々アフリカ人ミュージシャン数は少なからず増加している。例えば、セネガル人ミュージシャンに限るが、10年前は関西圏に來日したての1名しかいなかったが（現在は帰国）、現在（2019年12月現在）では5名に増えている。また、関東圏に筆者が行った際にも、今まで会ったことがなかったドラマーやダンサーがクラスでサポートしていることがあり、毎回驚かされる。他の來日外国人の数とは比較できないほど圧倒的少数ではあるが、日本で「サバル」に関わるセネガル人が増えたことは、その「界限」においては大きな出来事である。

しかし増加による影響か、日本人の愛好者内というごく限られた範囲ではあるが、セネガル人を含むアフリカ人のミュージシャンの存在に対する「もの珍しさ」は薄くなってきているようにも感じる。関東圏には誰が、関西圏には誰がいて、どういった活動をしているか、などはSNSを検索すれば即座に分かる。また愛好者のコミュニティは狭いため、あの日本人の愛好者がどこの国の誰を連れてきた、などという情報も、あつという間に拡散する。以前であれば、母国では特に太鼓やダンスを専門的に学んでいなくとも、日本でその容姿等を利用し「偽ミュージシャン」として活動するといった「ハッター」が利いた場合もあった。しかし現在では、「ホンモノ」のアフリカ人ミュージシャン数の増加したのみならず、愛好者の目も耳も肥え、そういった「ハッター」を利かせることが難しくなっている。数年以上前になるが、筆者は西アフリカのある国出身の太鼓叩きを称する人と出会ったことがある。しかし、氏のステージ演奏を聞く限り、その技術やパフォーマンスは決して優れたものではなく、私と一緒にいた他の日本人の愛好者たちも全く同様の反応をしていた。後で確認したところ、その人は母国では仕立屋をしていたと言う。現在では、その氏が演奏しているのを筆者は見えていない。

日本人の愛好者の中には、講師として指導に従事したり演者としてステージに立ったりする人もいる。2000年代後半には、日本人とセネガル人（や他のアフリカ人）との指導者や演者としての立場を巡る摩擦も見られたが、最近では表立ってそういった話を耳にすることは少なくなってきたように思う。双方の「棲み分け」ないし「共存」ができつつあるようである。ま

た、セネガル人ミュージシャンの中には、日本人とアフロミュージックのバンドを組み全国的に演奏活動をおこなうものや、パーカッショニストとして日本の有名演奏家や歌手のバンドに参加するものも始始めている。彼らは、「伝統的なアフリカ音楽」という枠にはまらない形式を生み出している。

先述した AM 氏は、定期的なダンスクラスを 2010 年頃から休止していたが（外部から講師が来た際などの不定期クラスは開講）、2014 年より筆者の強い意向を受け入れ、筆者がコーディネートを務めることを条件に、「サバル」の太鼓とダンスクラスを約月 1 回開催することになった。クラスへの参加者数は決して多くないが、現在まで継続して開催できている。東海地区で定期的な「サバル」クラスが開催される以前に、関西圏でもクラスが開催されるようになった。これも日本人の愛好者による強い意向があり、実現したものだ<sup>11</sup>。

このように日本人の興味・関心に起因する新たなクラスの開催は、「サバル」に限ったことではない。例えば、今まではジェンベといえバギニアのリズムが中心だったが、マリ共和国のジェンベのリズムやカソンケ（民族）の太鼓を演奏したり踊ったりするクラスが東京で定期開催されるのみならず、全国各地で不定期に開催されるようになった。また、楽器もマリの弦楽器やガンビアの太鼓などを扱う日本人も増え始めている。太鼓の演奏を伴うダンス以外にも、ガーナ共和国のアゾント *Azonto* やコートジボワール共和国のクペデカリ *Coupé-décalé*、南アフリカ共和国のパンツラ *Pantsula* といったアフロビーツに乗って踊るダンスも紹介され始めている。それに伴い、現地で有名なダンサーが短期で招聘され、日本でクラスをおこなう事例も出てきた。

筆者が調査研究を始めて約 15 年の間に、一辺倒に近かった西アフリカの音楽は少しずつではあるが、ジャンルの広がりを見せるようになった。それと共に、アフリカ人と日本人との協力関係も強化されているように思われる。それぞれが自身の立ち位置や強みを模索しながら、今の棲み分け／共存の関係性を構築してきた。今後もおそらくさらに多くのアフリカ発信の音楽が「来日」することが推察できる。その動きは変わらず注視していきたい。

## 2-2. セネガル現地における関係性

先述したように、アフリカ現地へ渡航する日本人の愛好者の存在がある。中には一度のみならず、毎年のように現地へ渡航する人も少なくない。彼らは、日本人ないし在日セネガル人、または欧米諸国在住のセネガル人、欧米人主催のワークショップ・ツアーを利用するか、個人でツテを利用し、渡航するパターンがある【菅野 2011, 2015】。筆者が初めてセネガルに渡航した 2005 年当時から 2019 年現在の調査の間で、現地でクラスを受講した際の価格帯やその他いくつかの点において変化が見受けられた。

2005、6 年当時、筆者がある有名ダンス講師に師事していた際は、ドラマー 1 名ないし 2 名が帯同し、2 時間で 8,000CFA（約 1,600 円）だった（2008 年には、2 時間 10,000CFA（約 2,000 円）へ値上がりした）。2010 年以降、それまでとは違う有名ダンス講師に師事した際は、ドラマーが

2名ないし3名つき、1.5時間 10,000～20,000CFA(約2,000円～3,000円) となっていた。世界的に有名なダンサーのみならず、地元で活躍する程度の講師も同額を請求している。日本でのクラス受講代は、概ね1.5時間で3,000円～3,500円である。かつて、現地での受講料は安く、高い航空券代を支払いつつも、現地で安くたくさん習えるという特典があると、日本人の愛好者の中で言われていた。しかし、この10年の間に一気に値上がりし、「日本の値段と変わらないよね。」という語りが多くの日本人の愛好者から聞かれるようになった。

これに対し、「お前ら（日本人／外国人）が払うからだ！」と滞日経験のあるセネガル人ミュージシャンが言っていた、と日本人の愛好者から聞いた（2019年4月および10月、日本人愛好者より聞き取り）。2000年代、現地へ渡航経験のある日本人の愛好者らは、現地の講師と値段交渉を頻繁にしていた。筆者も同様であり、積極的に交渉していた。しかし、2010年代に入るとあまり、そういった語りを聞くことがなくなり、提示された金額を支払っているようである。愛好者同士で、どこどこの誰々先生は1クラスいくらで開催してくれた、という話は現在でも頻繁になされている。

筆者も近年では、言われた金額をそのまま支払う場合が多い。その理由のひとつとしては、筆者が近年受けるクラスは、マンツーマン指導ないし少人数での指導を受けていることが挙げられる。ダンスクラスには必ず太鼓の演奏が必要になる。そのため、その演奏を担当するドラマーにも、謝礼を支払わなければならないのである。基本的にクラスでの取り分は分配制のため、その場でリーダー格がそれを各人に配分する。それを知っていることもあり、あまりにも安い金額を支払うことは、全員分を賄う謝礼として相応しくないのではないかと考えるようになったからである。2005、6年に筆者が師事していた講師は、立場・年齢ともに高く、筆者が支払った謝礼をほとんど自分の取り分にしていたようである。だが、現在は比較的若手を講師としており、また、少人数指導を受けているため、ある程度の額を支払うことは筆者自身、致し方ないと思っはいる。そうは言っても、それほど有名ではない講師に大人数で習う場合でも高額を請求されているという話を聞くと、些か疑問が残る。

実際のところ、外国人の愛好者向けのクラスによる収入に頼る現地のセネガル人ダンサーやドラマーは存在する。太鼓やダンスを踊る以外にアルバイトや何かしらの仕事をしている人もいるが、多くがそれのみで生活しているため、収入は決して多くはなく安定もしていない。毎



写真2 ダンスクラスをサポートするドラマーたち（2019年2月筆者撮影）

年12月から3月頃の乾季を中心に、外国人が現地を訪れるのだが、そのあたりはクラスが多く開催されるため、書き入れ時となる<sup>12</sup>。こういった現状も鑑みると、受け入れ側もできるだけ多くの収入を得るために、値段を上げてきたと考えられる。また、支払う側も現地での相場をあまり知らないがゆえに、言われるままの金額を払ってきてしまった流れが定着したのではないかと推察している。

こうしたワークショップ・ツアーは以前、セネガルの首都ダカール市を開催の中心に据えられたものばかりだったが、近年ではセネガルの南部カザマンズ地方へのツアーも開催されるようになってきた。これは参加者のニーズに応えたためではあるが、各国で開催されている他のツアーとの差別化を図るためでもあると考える。最近では、いくつかのワークショップ・ツアーを「ハシゴ」する愛好者も出始め、ツアー日程も他のものとなるべく重ならないような工夫がなされてきている。

セネガルに向かう日本人の愛好者の動向にも、変化が生じている。以前であれば、仕事を辞め、一念発起して高い航空券とツアー代金を支払い、「一生に一度のアフリカ旅」という気分で現地へ旅立った愛好者がほとんどだったが、現在ではそこまでの「特別性」は失われているように見える。日本からアフリカ行きの航空券が比較的安価になってきたこと<sup>13</sup>と、現地へ渡航した愛好者や在日セネガル人ミュージシャンの増加に伴い、現地情報を得る手段が増えてきたことなどにより、アフリカに対する「心理的距離」が少なからず近くなってきたからなのではないだろうか。

### 3. 日本人愛好者と他諸国の愛好者との関係性

「サバール」を介して関係してくるのは、何もセネガル人だけではない。欧米諸国など、諸外国の愛好者とも出会う。セネガルで開催中のツアーで一緒になったり、ツアー参加者ではないが、クラスだけ一緒になる場合もあり、出会う機会は多い。彼らの共通言語の多くは英語、ないしセネガルの主要言語であるウォロフ語である。欧米諸国の愛好者とセネガル人はフランス語で会話をすることが多いが、日本人でフランス語を理解する人が多くないため、たいていの場合日本人とのコミュニケーションは英語になる。ただ、中にはフランス語も英語も理解しないがウォロフ語は流暢な日本人がおり、その場合は第一言語がウォロフ語となる。欧米人と日本人がウォロフ語で会話しているとセネガル人からとても驚かれる、とセネガル在住の日本人愛好者が語っていた。

日本人同士でもそうだが、セネガルで一緒に生活ないしクラスを受け、時間を共有するということは、仲間意識が生まれやすく、帰国後もSNSなどを通じて交流は続く。お互いにサバールを愛好している者同士、切磋琢磨し学びあう場合もある。2013年に筆者がセネガルに滞在していた際は、同じ講師のクラスを受けていた北欧出身の愛好者2名、日本人の愛好者3名で、それぞれタイミングが合う時に、共に（演奏される場としての）「サバール」に行って踊ったり、セネガル人講師も含めた数名でステージに立ったりしたこともあった。こうした交流の



中で、北欧の愛好者の母国に招聘され、ダンス講師を務めた日本人の愛好者もいる。

他諸国の愛好者との出会いは、セネガル以外でも見受けられる。アメリカやオランダで開催される年1回の「サバール」を中心としたワークショップ合宿（3日間）がある。どちらも、セネガル本国や海外在住のセネガル人のドラマーやダンサーを招聘し、大規模に開催されるものである。2019年5月に開催されたアメリカ合宿では、日本在住のセネガル人ダンサーが招聘され、また、日本人の愛好者も数名参加していた。SNSでの観察に過ぎないが、この合宿にはアメリカのみならずヨーロッパからの参加者も多数いたようだ。また、2019年6月開催のオランダ合宿では、日本から2名の愛好者が参加していた。さらに、同年10月にドイツで開催されていた特別クラスにも、日本人から1名の愛好者が参加していた。愛好者との会話の中で、セネガル現地へも行きたいが、こういった欧米諸国で開催される合宿にむしろ行きたい、という話を近年では耳にするようになってきた。その全員が、既にセネガル滞在経験のある愛好者たちである。セネガル本国に行くよりも交通の便から見ても近く、集中的に安定した場所で選りすぐりの講師陣に習えるということが魅力のひとつになっているようである。

SNSの閲覧による観察に過ぎないが、ヨーロッパ諸国では、特にスウェーデンやフィンランド、デンマーク、オランダ、フランス、イタリア間での、愛好者やミュージシャンの行き来が頻繁に見られる。「サバール」を通じて愛好者およびセネガル人同士の交流が図られ、かつ、それぞれが切磋琢磨しあっているようである。

地理的な距離もあり、日本と他諸国の愛好者の行き来は、日本人が欧米諸国に出向くことはあっても、あちらから日本に「サバール」のために来るということとはあまり見られない。また、アジア近隣諸国との行き来も、「サバール」に関してはほとんどない。ジェンベに関して言えば、韓国や中国、台湾、シンガポールなどと愛好者や在日ドラマーが行き来し、共にワークショップやイベントに出演などを果たしている事例が既に複数存在している。韓国にも「サバール」を踊る愛好者もいることから、今後交流が始まる可能性もある。注視していきたい。

筆者は現時点で、欧米諸国の状況は、SNSなどを通じてのみ情報を収集している。情報が即座に全世界に伝わるこのツールは、重要な情報源のひとつとして見逃すことができないものであり、SNS上のやり取り、交流は、「サバール」で形成された「仮想コミュニティ」とも言える。この「仮想コミュニティ」は世界の情報を収集する上で、看過できない存在である。

SNSの普及による情報の拡散は、他の変化も生みだしている。例えば、自分の踊る姿や演奏する姿を投稿し、そこに情報拡散のためのハッシュタグをつけるなどして、多くの人々の目につくようにする愛好者も見られるようになってきた。その中には、セネガルの番組でその映像が取り上げられた欧米在住の愛好者もいる。また、セネガルや世界各地に在住しているセネガル人ミュージシャンも自身の演奏や踊りを投稿しており、それを集客に繋げている場合もある。例えば、動画でその人の演奏やクラス風景を見ていれば、この人がどういった演者でどのようなクラスをおこなうかなどが分かり、参加を促しやすくなっている。ある日本人の愛好者は、SNSで見た動画のヨーロッパ在住のダンサーが気に入り、その人にいつか習うことが夢、と語っていた。SNSでの動画発信による集客は、日本国内でも見られる。ある時、短期滞在

中のセネガル人女性ダンサーの名古屋クラスを筆者がオーガナイズした際に、そのダンサーが踊っている動画を宣伝のために投稿した。そうしたところ、今まで「サバール」を踊ったことのない人が、その動画を見て感激し、ぜひともクラスを受けたいと参加してくれたことがあった。SNSは今や外すことのできないツールなのである。

欧米諸国の愛好者およびセネガル人との関係から、彼らはひとつの国にとどまることなく、互いに行き来するトランスナショナルな活動が明らかになった。日本人の愛好者も、少しずつではあるが、徐々にその活動に取り込まれつつあるようだ。その主たる要因として、SNSの世界的な普及が挙げられる。これによって「サバール」で形成された「仮想コミュニティ」が成立していると言えるだろう。欧米諸国の状況は、近いうちに現地でのフィールドワークを実現し、その様相を明らかにしていく予定である。

#### 4. おわりに

日本で「生き抜く術」として場に応じてアフリカ人としての立場の使い分けてきたセネガル人ミュージシャン【菅野 2009】ではあるが、近年のアフリカ人増加と愛好者のライフスタイルの変化などにより、ワークショップの定期開催中断などの影響を受けていることが明らかとなった。その過程で、愛好者の希望に応え新たにクラスを開催したり、アフリカの「伝統音楽／舞踊」という範疇にとらわれない音楽活動に専念したりするセネガル人ミュージシャンも現れるようになった。また、日本人の愛好者との棲み分け／共存も進んできた。取り巻く環境の変化はセネガル現地でも見られ、外国人向けクラスの金額も変化が生じてきた。しかし、現地のドラマーやダンサーにとってはそれが収入源にも価値づけにもなるため、なかなか値下げはできないようである。

SNSを介した「サバール」の「仮想コミュニティ」は拡大傾向にあり、セネガルと日本、セネガルと欧米諸国、といった2拠点に限った人々の往来ではなくなってきた。セネガルと日本とアメリカ、日本とセネガルと北欧、などといった多拠点に移動するセネガル人、愛好者が見られるようになった。「仮想コミュニティ」の存在と、SNS上での写真や動画投稿による状況の「見える化」により、移動に伴う不安は少なからず解消され、むしろその移動を積極的に促進するような現象が起きつつある。今後もこの傾向は強まっていくと考える。

経済活動の主として「サバール」を据え、移動をしているセネガル人、愛好者は少ない。多くのセネガル人にとっては、移動のきっかけを得るための手段としての「サバール」なのである。あくまでも、「サバール」は移動に付随するものに他ならない。一方、愛好者にとっても移動のきっかけは「サバール」である。しかし、愛好者にとっては「サバール」ありきの移動であり、それがなければ移動することはない。彼らは「サバール」を習得するために移動するのである。いずれにせよ、セネガルという国家を表象するものと位置づけられた「サバール」が、ごく少数に限られた「サバール」を取り巻く人々にとっては、トランスナショナルに移動するためのツール、となっているのである。

こういった愛好者およびミュージシャンの動向を今後も注視していくことは、いずれ「文化的大使」として世界に放たれた舞踊／音楽の行く末を明らかにできると考える。今後の課題としたい。

## 注

- 1 セネガル共和国概要。面積：197,161平方キロメートル（日本の約半分）。人口：1,674万人（2019年UN）、首都ダカール（約250万人）。民族：ウォロフ、プル、セレール他。言語：フランス語、ウォロフ語他各民族語。宗教：イスラム教95%、キリスト教5%、伝統的宗教。
- 2 サバールとは。セネガル独自の太鼓であり、主に、セネガル沿岸部の民族（ウォロフ、セレール等）で演奏される太鼓。マホガニーなどの木をくり抜き、片面にヤギの皮を張る。利き手にガレン *galen* と呼ばれるバチを持ち、他方は素手で叩く太鼓。それと共に踊られるダンスは、手や足の動きを伴い跳躍が多い。即興性が高く、ドラマーがダンサーの動きに合わせて叩く、珍しい形態。
- 3 音楽を演奏する伝統的職能集団。ウォロフ語ではゲウエル *géwël*、フランス語ではグリオ *griot* と呼ばれる。
- 4 サバールに関する詳細な研究はTang【Tang 2007】が詳しい。
- 5 海外へ発信されたサバールに関しては、ニューヨークとダカールで調査をおこなったBizas【Bizas 2014】の研究がある。日本に展開されたアフリカの舞踊や音楽に関する研究は、和崎【和崎2008】による在日アフリカ人の研究を基軸に、鈴木【鈴木2008他】によるギニア人の舞踊／音楽に関する研究が詳しい。
- 6 「サバールをする」ために短期間のみ来日する場合もある。
- 7 ジェンベとは。西アフリカを中心に演奏されている太鼓。マホガニーなどの堅い木をくり抜き、ヤギの皮を張ったもの。素手で叩く。
- 8 セネガルの舞踊団では、演目の中に、サバールとジェンベの両方が組み込まれている。時にはセネガル南部カザマンズ地方や隣国ガンビアを中心に演奏されている太鼓ソルーバやブガラブが演奏されることもある。ジェンベはセネガル国内（特に沿岸部）では日常的に演奏されることは少なく、一般の人が踊ることはほとんどない。
- 9 太鼓のリズムを理解していなければ、それに合わせて踊ることはできないためである。日本人などの愛好者も、ダンスを習う人は太鼓も併せて習うことを勧められる。筆者も両方習得している。
- 10 「サバール」はその複雑さ、ステップの難解さから敬遠されがちであった。ジェンベも同様に複雑な部分はあるものの、初心者の日本人でも理解しやすいリズムもあるため、好まれやすいと筆者は推察している。
- 11 東京では10年以上前から定期的開催されている。
- 12 若手の場合は、外国人への教授経験はステータスにもなり得るし、そこで外国へ出るきっかけを得る可能性もある【菅野2009】。場合によっては、そこで外国人の愛好者と恋愛関係になり、結婚を機にその愛好者の国へ移住することが可能となる。そうではあっても、外国人への教授が不慣れだったり、外国人受講者に恋愛関係になることを求めすぎたりすることで、受講者が愛想を尽かし、クラス自体が成立しなくなる場合も少なからずある。
- 13 筆者が支払ってきた額を見ても、現在では15年前の額の半分程度で日本—セネガル間を往復で

きる。

### 参考文献

- 小内徹 (2007) 「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」『調査と社会理論』研究報告書 24 pp. 1-11
- 菅野淑 (2008) 「在日セネガル人と日本人愛好者による『アフリカ舞踊音楽』活動の事例報告」和崎春日代表 科学技術研究費『滞日アフリカ人の生活戦略と日本社会における多民族共生に関する都市人類学的研究』基盤研究 (A) 研究番号：19202029 報告書 pp. 83-96
- (2009) 「在日アフリカ人ミュージシャンの生き抜く術—在日セネガル人ミュージシャンの事例から—」『比較人文学年報 6』 pp. 77-96 名古屋大学大学院文学研究科
- (2010) 「日本における『アフリカン・ダンス』」『比較人文学年報 7』 pp. 101-115 名古屋大学大学院文学研究科
- (2011) 「セネガルは「修行の場」—セネガルのダンスや太鼓を求める日本人たち—」『比較人文学年報 8』 pp. 23-39 名古屋大学大学院文学研究科
- (2015) 「『日本人は踊りが上手い』? —セネガル文化政策の現代的展開—」日本アフリカ学会第52回学術大会 (犬山国際観光センター) 2015.5.24 発表
- 鈴木裕之 (2008) 「日本に生きるアフリカ人ミュージシャン」和崎春日代表 科学技術研究費『滞日アフリカ人の生活戦略と日本社会における多民族共生に関する都市人類学的研究』基盤研究 (A) 研究番号：19202029 報告書 pp. 61-82
- 丸山英樹 (2016) 『トランスナショナル移民のインフォーマル教育—女性トルコ移民による内発的な社会参画』明石書店
- Bizas, Eleni, (2014) *Learning Senegalese Sabar, Dancers and Embodiment in New York and Dakar*, berghahn.
- Castaldi, Francesca, (2006) *Choreographies of African Identities Négritude, Dance, and the National Ballet of Senegal*, University of Illinois Press Urbana and Chicago.
- Kringelbach, Hélène Neveu, (2012) *Moving Shadows of Casamance: Performance and Regionalism in Senegal*, berghahn, pp. 143-160
- (2013) *Dance Circle, Movement, Morality and Self-Fashioning in Urban Senegal*, berghahn.
- Tang, Patricia, (2007) *Master of the Sabar, Wolof Griot Percussionists of Senegal*, Temple University Press.